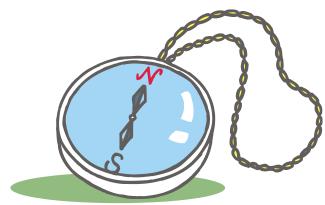


羅針盤



第 6 号

令和4年(2022年)5月16日(月)

◆ 初心忘るべからず

生徒の皆さんもよく知っている言葉だと思いますが、「初心忘るべからず」という言葉は、もともとは世阿弥（ぜあみ）の言葉です。「是非の初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず。老後の初心忘るべからず。」と3つに分けられている言葉がもととなっています。現代では、「物事に慣れると慢心してしまいがちだが、最初の頃の志を忘れてはいけない」といった意味で使われるのが一般的です。しかしながら、世阿弥が残したこの言葉は、もっと深く、纖細な意味をもっています。世阿弥という人は、室町時代の人で、能（のう）の大成者です。当時は各地で、猿楽（さるがく）や田楽（でんがく）といったものが催されていましたが、室町幕府の三代将軍足利義満の庇護を受けて、観阿弥（かんあみ）と世阿弥（ぜあみ）の親子が能を芸術として進化させました。世阿弥が観阿弥から伝えられた芸の極意をまとめた『風姿花伝（ふうしきでん）』と、後期に著（あらわ）した『花鏡（かきょう）』は、日本の文化史上でも特に優れた作品とされていて、世界的にも類を見ない芸術論とされています。「初心忘るべからず」は、その『花鏡』の最後の「奥の段」に出てくる言葉です。最初の「是非の初心忘るべからず。」という言葉が説いているのは、「未熟だったときの芸も忘れることなく、判断基準として芸を向上させていかねばならない」ということです。つまり、舞台に立ったばかりの若い頃は、芸も未熟であり、どうしたらうまくいくかといったこともわからないけれど、経験を積むことで判断基準が明確になっていくということです。次に、「時々の初心忘るべからず。」は、「その年齢にふさわしい芸に挑むということは、その段階において初心者であり、やはり、未熟さや、つたなさがある。そのひとつひとつを忘れてはならない」といことです。これは、習得した芸をその場限りのものとしては、幅広い芸を身につけることはできないということであり、年齢にふさわしいチャレンジをしていくことが必要であるということです。そして最後の「老後の初心忘るべからず。」は、「老年期になって初めて芸というものがあり、初心がある。年をとったからもういいとか、完成したとかいうことではない」ということを意味しています。この「初心忘るべからず」という言葉は、どこまでも限りなく芸の向上をめざすべきであるということを説いているわけであって、どの世代の人にもあてはめて考えることができる本当に奥の深い言葉です。初めて物事に取り組むときには、新鮮な気持ちや初々しい気持ち以上に、自分の未熟さを決して忘れてはいけない、つたなかつたときの自分の姿を忘れるなどということです。誰しも、おごり高ぶったり、油断する気持ちをもちあわせています。そんな気持ちを戒めて、謙虚な気持ちで物事にはあたるべきであるということを教えてくれています。未熟であるという自分の姿をしっかりと心に刻みながら、しかも「初心」は世代を超えて一生続くものであるということをしっかりと自覚し、それまでに残してきた業績の大小にかかわらず、慣れてしまっている自分自身を戒め、「初心」に戻ることで常に愚直に新たな気持ちをもちながら、自ら進むべき道をひたすらに邁進することの大切さを学ぶことができる言葉であると思います。

